

スポーツボランティア研修会 テキスト

目次

第1章 概論 スポーツボランティアとは

| | | |
|-----|-----------------|---|
| 1 | スポーツボランティアの定義 | 1 |
| 1-1 | ボランティアの定義 | |
| 1-2 | スポーツの定義 | |
| 1-3 | スポーツボランティアの定義 | |
| 1-4 | チームの定義 | |
| 1-5 | リーダーの定義 | |
| 2 | スポーツボランティアについて | 3 |
| 2-1 | スポーツボランティアの楽しみ方 | |
| 2-2 | 仲間づくりと仲間の受け入れ方 | |

第2章 理論 スポーツボランティアに関する社会状況

| | | |
|-----|----------------------------|---|
| 1 | スポーツボランティアの統計 | 4 |
| 1-1 | データで見るスポーツボランティア | |
| 1-2 | スポーツライフ（する・みる・ささえる）の現状で見ると | |
| 2 | スポーツボランティアの分類と様々な活動 | 6 |
| 2-1 | スポーツボランティアの分類 | |
| 2-2 | スポーツボランティアの活動紹介 | |
| 3 | 障害のある人のスポーツ | 8 |
| 3-1 | ダイバーシティとは | |
| 3-2 | スポーツボランティアにおけるダイバーシティ | |
| 3-3 | 障害者スポーツの起源 | |
| 3-4 | 障害者スポーツの可能性 | |
| 3-5 | 障害者スポーツの国際大会 | |

第3章 実践 コミュニケーションスキル

| | | |
|-----|----------------|----|
| 1 | アイスブレイク | 13 |
| 1-1 | はじめに | |
| 1-2 | 心地よい空間を創り出すために | |
| 1-3 | グループワーク | |

第4章 資料 日本スポーツボランティアネットワーク (JSVN)

| | |
|------------------------|----|
| 1 活動について | 15 |
| 1-1 設立意義と目的 | |
| 2 主な事業 | 17 |
| 2-1 3つの事業 | |
| 2-2 スポーツボランティア養成事業 | |
| 2-3 コーディネート事業 | |
| 2-4 スポーツボランティア周知・啓発事業 | |
| 3 スポーツボランティア養成プログラムの概要 | 19 |
| 3-1 講習会概要 | |
| 3-2 更新講習概要 | |
| 3-3 講師・指導者制度概要 | |

スポーツボランティアとは

1 スポーツボランティアの定義

1-1 ボランティアの定義

ボランティアとは、自主的に社会活動等に参加する人や活動のことである。ボランティア活動は、「自主（自発）性、公益（社会、公共）性、無償性」に基づく活動とされる。今日では、これらに「先駆（先見、創造、開拓）性」を加えて4原則とすることが多い。さらに、日本の研究者によっては、一過性でなく継続的に活動を行うという意味で「継続性」も加えて、5原則としている。

（日本スポーツボランティア学会「スポーツボランティアハンドブック」2008）

英語のボランティア（volunteer）の語源は「志願兵」であり、現在も本来の語義通り「志願兵」や「義勇兵」の意味でも使われている（対義語はdraft：「徴集兵」）。歴史的には、騎士団や十字軍などの宗教的意味を持つ団体にまで遡ることができ、ラテン語のvolo（ウォロ：「意思、決意、願望」の意味を持つ英語willの語源）に関係するといわれている。

なお、ボランタリー（voluntary）とは、「自発的であるさま」のことである。

1-2 スポーツの定義

スポーツとは、“名辞（めいじ）であるが物的存在ではない”（名辞：言語によって表現された概念のこと）と説明されることがある。あるいは、“その言葉（スポーツ）は存在のない現象である”、“競技スポーツ種目の総称である”などとも表現される。

Verlag Karl Hofmannによる辞書“Dictionary of Sport Science”では、スポーツについて次のように説明している。

「スポーツの正確な定義はできない。それは、話し言葉の持つ意味が多岐にわたっているからである。スポーツという言葉は、その境界が科学的な分析がなされ、はっきり決められている訳ではない。」

英語のスポーツ（sport,sports）の語源は、「日々の生活から離れる」という意味のラテン語 deportare だと言われ、「気晴らし」「休養する」「遊ぶ」などをさす言葉であった。また現在は、チェスやダーツ、キャンプ活動等も「スポーツ」に含まれる。

1-3 スポーツボランティアの定義

スポーツボランティアの定義としては、以下のようなものがある。

「スポーツという文化の発展のために金銭的報酬を期待することなく、自ら進んでスポーツ活動を支援する人（活動）のこと」
(日本スポーツボランティア・アソシエーション2004)

「地域におけるスポーツクラブやスポーツ団体において、報酬を目的としないで、クラブ・団体の運営や指導活動を日常的に支えたり、また、国際競技大会や地域スポーツ大会などにおいて、専門的能力や時間などを進んで提供し、大会の運営を支える人のこと」

(文部省（現・文部科学省）スポーツにおけるボランティア活動の実態等に関する調査研究協力者会議
「スポーツにおけるボランティア活動の実態等に関する調査研究報告書」2000)

1-4 チームの定義

チームの定義は、「共通の目的や達成すべき目標、そのためのアプローチを共有した少数の集合体」であるとされている。つまり、「仲間が思いをひとつにして同じゴールに向かって進み、機能する」のがチームだといえる。

日本社会では、協調性が重視され、個より集団が尊重されてきた。しかし、それは個の考えよりも多数の意見を重視するものであり、多数の意見と異なる者は排除されるといった集団文化であった。チームは単なる人の集まり、集団ではない。欧米から入ってきた「チームビルディング」の考え方では、まず個が尊重され、多様な個を組み合わせた集団をチームとして機能させることに重点がおかれる。

現在、スポーツイベントや競技大会において、スポーツボランティアは必要不可欠な存在であるが、スポーツボランティアが一人ひとりで行動してもイベントは機能しないどころか、かえって運営の妨げになることさえある。しかしまた、個が失われた集団は、単なる人の集まりでしかない。スポーツボランティアがめざすチームは、単なる集団ではなく、個々が尊重された上で同じゴールをめざす人たちの集まりである。そして、グループではなく「チーム」として機能した時、スポーツボランティアの力は無限に発揮される。
(チームビルディングジャパンホームページ <http://www.teambuildingjapan.com/>)

1-5 リーダーの定義

リーダーの定義は、「つき従う者がいる者」などとされる。ピーター・F・ドラッカー『プロフェッショナルの条件』によれば、「つき従う者」とは、強制力をもって従わされた者ではなく、そのリーダーを信頼するがゆえに、自らの意志に基づいて従う者を意味している。また、「リーダーとは、目標を定め、優先順位を決め、基準を定め、それを維持する者である」という考え方もある。

2 スポーツボランティアについて

2-1 スポーツボランティアの楽しみ方

スポーツボランティアを楽しむ方法は、スポーツの本質を分析すると見えてくる。

スポーツは、「スポーツをすることで、楽しみを享受できる」ことが、本来の“持ち味”である。一方、今日では、スポーツボランティアとしてスポーツ活動をささえることも、スポーツの楽しみ方のひとつとなっている。

「スポーツは筋書きのないストーリー」であり、展開や結末が決まっていないからこそ、観客が声援を送る。そこには「プレーによる湧きあがる感動や感激」がある。スポーツボランティアたちは、活動中その場面を直接見られないことも多いが、それでも、同じ瞬間に、同じ場所で同じ空気を共有できる。その意味で、スポーツボランティアたちも、スポーツという、感動の瞬間をささえた一員である。スポーツをする人、みる人らをささえ、スポーツにおける大切な役割をまっとうできたことこそ醍醐味となる。さらに、この喜びは他のボランティアと分かち合うことで倍増し、自身のかけがえのない記憶となる。それこそが、「スポーツボランティアの楽しみ」である。

(日本スポーツボランティア学会「スポーツボランティアハンドブック」2008)

スポーツボランティアの意義・やりがい

- ・スポーツをする人・みる人の役に立てる
- ・世代や職業・経歴の異なる仲間ができる
- ・役割をまっとうする達成感を仲間と共有できる
- ・自身の専門性・特技を生かした活動ができる
- ・さまざまなスポーツと接することができる
- ・スポーツ以外のボランティア活動へも広がる

2-2 仲間づくりと仲間の受け入れ方

どんな分野においても、同じ志を持った者が集い、仲間になることはすばらしい。特にスポーツボランティア活動体験者からは、活動に参加することですばらしい経験を得られたとの感想が多く聞かれる。より多くの人々がスポーツボランティアに参加する機会を得て、充実したボランティア活動を通じて仲間を増やし、生活に潤いが生まれることを期待したい。

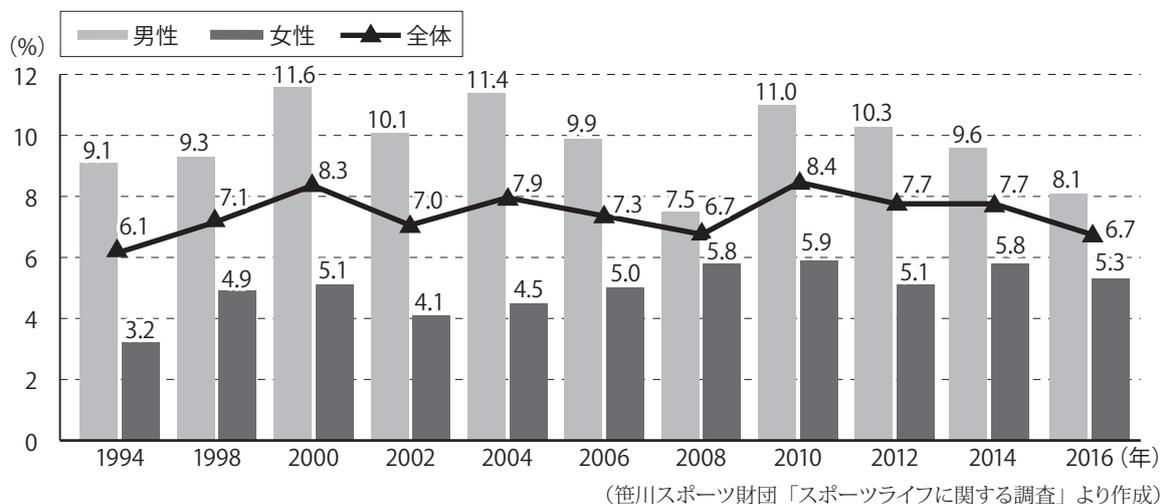
スポーツボランティアに関する社会状況

1 スポーツボランティアの統計

1-1 データで見るスポーツボランティア

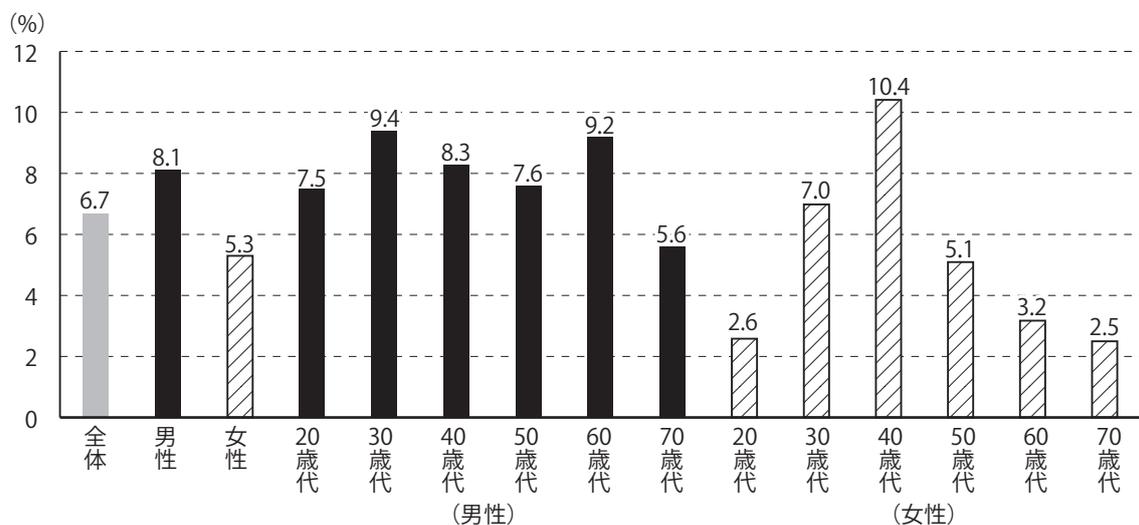
過去1年間にスポーツボランティアを行ったことが「ある」と回答した者は成人全体の6.7%で、2014年調査と比べて1.0ポイント減少している。1994年からの経年で見ると、2010年で最高値となったが、過去20年間ほぼ横ばいの状況である。

●成人のスポーツボランティア実施率の年次推移



スポーツボランティア実施率を性別、年代別に見ると下のグラフの通り。性別に見ると、男性が8.1%、女性が5.4%と、男性の方が女性よりも実施率が高かった。また、年代別では、男性では30代、女性では40代の実施率が最も高くなっている。

●成人のスポーツボランティア実施率（性別、年代別）



●スポーツボランティアの実施希望率

今後のスポーツボランティアの実施希望をたずねたところ、「行いたい」（「ぜひ行いたい」＋「できれば行いたい」と回答した者の割合（実施希望率）は、成人では13.9%だった。実施率6.7%に対して実施希望率13.9%と、潜在需要の割合（実施希望率－実施率）は7.2%あることがわかる。一方、10代の場合は、実施率は15.0%（男子18.0%、女子12.1%）、実施希望率は38.3%という結果だった。また過去1年間にスポーツボランティアを行ったことが「ある」と回答した者を対象に、実施した活動は楽しかったかどうか、スポーツボランティアの内容別にたずねた結果、「スポーツイベントの手伝い」については「楽しかった」が48.5%、「どちらかという楽しかった」が29.1%と、3/4以上が「楽しかった」と回答している。

●スポーツボランティアの内容

スポーツボランティアの実施内容について、『日常的な活動』『地域のスポーツイベント』『全国・国際的なスポーツイベント』に大別し、具体的な活動の内容、年間の実施回数についてたずねた。活動内容の上位は表1の通り。

●ボランティア活動内容の上位（成人）

| | |
|------------------|-------|
| 地域の大会・イベントの運営や世話 | 50.8% |
| 日常的な団体・クラブの運営や世話 | 36.4% |
| 日常的なスポーツの指導 | 28.7% |

（笹川スポーツ財団「スポーツライフに関する調査」2016、笹川スポーツ財団「10代のスポーツライフに関する調査」2015より作成）

1-2 スポーツライフ（する・みる・ささえる）の現状で見ると

スポーツには、「する・みる・ささえる」の3つの楽しみ方があるといわれる。「するスポーツ」は自らスポーツを行うこと、「みるスポーツ」はスポーツ観戦、そして「ささえるスポーツ」がスポーツボランティアのことを指す。それぞれの割合は以下の通りで、まだまだスポーツボランティア実施率が低いことが分かる。

| | | 成人 (n=2,926) | 10代 (n=1,691) |
|----------|------------------|--------------|---------------|
| するスポーツ | 年1回以上実施 | 72.1% | 86.8% |
| | 週2回以上実施 | 44.8% | 68.6% |
| みるスポーツ※ | 年1回以上の直接スポーツ観戦 | 32.5% | 42.4% |
| ささえるスポーツ | 年1回以上のスポーツボランティア | 6.7% | 15.0% |

※過去1年間に競技場やグラウンドなどで、直接スポーツの試合等を観戦したことがある人

（笹川スポーツ財団「スポーツライフに関する調査」2016、「10代のスポーツライフに関する調査」2015より作成）

2 スポーツボランティアの分類と様々な活動

2-1 スポーツボランティアの分類

スポーツボランティアは役割とその範囲から、大きく3つに分類することができる。

- 定期的な「クラブ・団体ボランティア」
- 不定期な「イベントボランティア」
- トップアスリートやプロスポーツ選手による「アスリートボランティア」

クラブ・団体ボランティア（クラブ・スポーツ団体）—定期的活動—

●ボランティア指導者

指導・コーチ、指導アシスタント

●運営ボランティア

クラブ役員・幹事、世話役、運搬・運転、広報、データ処理、競技団体役員 など

イベントボランティア（地域スポーツ大会、国際・全国スポーツ大会）—不定期的活動—

●専門的ボランティア

審判、通訳、医療救護、大会役員、データ処理 など

●一般ボランティア

給水・給食、案内・受付、記録・掲示、交通整理、運搬・運転、ホストファミリー など

アスリートボランティア

●トップアスリート・プロスポーツ選手

ジュニアの指導、施設訪問、地域イベントの参加 など

2-2 スポーツボランティアの活動紹介

● クラブ・団体ボランティア

「クラブ・団体ボランティアは、地域スポーツクラブやスポーツ団体におけるボランティアを指しており、日常的で定期的な活動といえる。具体的には、地域のスポーツ少年団やママさんバレーボールチームなどで監督やコーチを務める「ボランティア指導者」が考えられる。これには、監督やコーチが指導する際の指導アシスタントも含まれる。また、クラブや団体の役員や幹事、練習時に給水などを担当する世話係、競技団体役員などの「運営ボランティア」も、クラブ・団体ボランティアに位置づけられる。」

(笹川スポーツ財団「スポーツ白書」2017)

● イベントボランティア

「イベントボランティアは、地域における市民マラソン大会や運動会、さらには国体や国際大会をささえるボランティアを指しており、不定期的活動といえる。イベントボランティアのうち、専門的な知識や技術が必要な「専門ボランティア」としては、審判員や通訳、医療救護員、データ処理、大会役員などがあげられる。「一般ボランティア」には、特別な技術や知識が不要で、誰にでも容易に関わることができる給水・給食、案内・受付、記録・掲示、交通整理、運搬・運転、そして選手の滞在・訪問を受け入れるホストファミリーなどがある。」

(笹川スポーツ財団「スポーツ白書」2017)

● アスリートボランティア

「現役・OBのプロスポーツ選手やトップアスリートによるアスリートボランティアは、オフシーズンに福祉施設を訪ねたり、ジュニアのスポーツ指導や地域のイベントに参加したりする社会貢献活動に奉仕する。プロ野球選手やプロサッカー選手の活動はもとより、最近ではさまざまな種目のトップアスリートが一般社団法人やNPO法人等を組織し、活動するケースが増えている。総合型地域スポーツクラブ（総合型クラブ）の普及やイベントの多様化、国際的なスポーツイベントの開催等により、スポーツボランティアの果たす役割は、今後さらに重要になるであろう。」

(笹川スポーツ財団「スポーツ白書」2017)

3 障害のある人のスポーツ

3-1 ダイバーシティとは

ダイバーシティは「多様性」と訳される。もともとはアメリカにおける人種や女性に対する機会均等や差別是正から生まれた考え方である。本来は「Diversity and Inclusion (多様性と受容)」であり、多様な人が集まり、その違いを受け入れて互いを尊重しながら生きる社会を表している。

性別や国籍の違いにだけ着目して「女性は〇〇だから」とか「日本人は〇〇だから」と表現すれば、かえって偏見を生んでしまうことになる。人と人の違いは外見から判断できる性別、年齢、国籍といったものだけではなく、職業、趣味や価値観など内面の要素が組み合わさり、その属性は無限大にあると言われている。

多様な人々が集まり活躍する社会には、様々な能力や豊かな視点がある。以前は多様な社会の在り方は、ひとつのお皿の中で、様々な材料がそれぞれの味を主張しながら存在する一皿のサラダに例えられた。近年は様々な色が重なり合って、回転させるたびに違う情景を作り出す万華鏡の方が近いと言われる。多様な個性が繋がることで相互作用を生み、新たな可能性を作り出すのである。

ダイバーシティの基本概念は次の3つである。

- ①それぞれの「違い」を尊重し受け入れること
- ②「違い」を称える（価値を見つける）こと
- ③一人ひとりが活躍する機会を与えられ、また活躍できること

3-2 スポーツボランティアにおけるダイバーシティ

ボランティア活動の現場は社会の縮図であり、そこには幅広い世代、学生や会社員、障害のある人やない人など多様な人が集まっている。互いの良さを尊重しながら一人ひとりがチームに貢献することが、まさにダイバーシティ社会の在り方と言える。

ボランティア間のダイバーシティは、活動自体をより良いものにする。たとえばチームでスポーツイベント会場内の案内という活動をしていたとする。チームのダイバーシティを生かし、それぞれのボランティアが自分の視点からの気づきを共有したならば、「口頭での説明に頼らず図面を使ってみよう」とか、「通路に小さな分りにくい段差があるので声をかけて注意を促そう」と、気づきにくいポイントにも配慮することができる。

個々人の多様性への配慮は、多様であるがために、マニュアルへ一律に落とし込むのは難しいが、多様なボランティア仲間の気づきを集めれば、マニュアルを超えた“おもてなし”が可能となる。

2020年東京オリンピック・パラリンピックのビジョンに「一人ひとりが互いを認め合う（多様性と調和）」がある。スポーツは参加する選手、観客とボランティアが自然に交流する機会を生み出す。交流することによって相手への関心が芽生え、それが他社への理解と受容へ発展する。人種、肌の色、性別、性的指向、言語、宗教、政治、障害の有無など、あらゆる面での違いを肯定し、自然に受け入れ、互いに認め合うことで、すべての人が自分らしく生き生きと暮らす社会の実現が期待されている。

3-3 障害者スポーツの起源

障害のある人たちのスポーツは、障害者の機能回復訓練としてはじまった。

ロンドン郊外のストック・マンデビル病院において、第二次世界大戦で負傷した傷病兵のために脊髄損傷病棟を開設。その責任者であったL.グットマン博士が、機能回復訓練（リハビリテーション）の手段としてスポーツを積極的に取り入れたのが、後にパラリンピックへと発展した。

その後、スポーツが持つリハビリテーション効果が、身体的な機能回復のみならず、スポーツで自信や勇気を取り戻し、物事に積極的に取り組むようになるなど、心理的な側面にもおよぶことが認識されるようになった。また、スポーツは、障害があることで孤独になりがちな障害者にとって、社会の一員としての自信を取り戻すための有効な機会であり、社会参加においても大きな効果があるともいわれる。現在、スポーツは障害者の余暇活動として、また、社会参加の重要な機会として捉えられるようになっている。



©おいでませ！山口大会

3-4 障害者スポーツの可能性

日本では、「障害者基本法」において、障害者を次のように定義している。

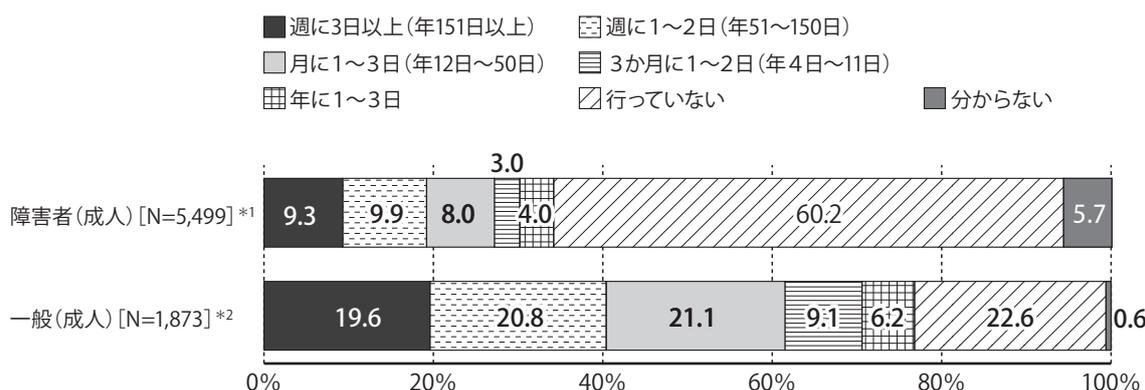
「身体障害、知的障害、精神障害（発達障害を含む。）その他の心身の機能の障害（以下「障害」と総称する。）がある者であって、障害及び社会的障壁により継続的に日常生活又は社会生活に相当な制限を受ける状況にあるものをいう。」

内閣府「平成26年版 障害者白書」によると、身体障害児・者、知的障害児・者と精神障害児・者を合計すると約787万人で、これは人口の約6%にあたる。およそ17人にひとりの割合となり、障害者が身近な存在であることがわかる。

スポーツには3-3に述べたような効果があるが、それと同様に重要なのは、人が等しくスポーツをする権利を持っていることである。2011年に施行された「スポーツ基本法」には、「スポーツを通じて幸福で豊かな生活を営むことは、全ての人々の権利」と記されている。

障害のある人の中には身体を動かすこと自体が難しい人もいるが、身体を動かすことができる人にとって、スポーツは重要な余暇活動のひとつである。しかしながら、2015年にスポーツ庁が実施した調査によると、「週に3日以上」と「週に1～2日」を合わせた、「週1日以上」のスポーツ実施率では一般成人が40.2%なのに対し、障害者では19.2%であり、障害者は一般成人の半分程度となっている（下のグラフ）。障害のある人が、一般の成人にくらべて、スポーツをしていない実態が確認できる。スポーツ基本法の施行後、こうした環境の改善が期待されているが、まだまだ、健常者のスポーツ環境に比べると改善点が多い。中でも、例えば障害があるために体育館までの移動が難しい、ひとりで練習することが難しいといった人にとって、スポーツボランティアによる支援は特に有効的である。

●過去1年間に運動・スポーツを行った日数



*1 スポーツ庁「障害児・者のスポーツライフに関する調査」(2015)

*2 内閣府「東京オリンピック・パラリンピックに関する世論調査」(2015年6月)

また、障害者がスポーツを楽しむためには、個々の障害者の身体の状態に合わせて、安全に配慮したスポーツ指導ができる人材が求められる。日本障がい者スポーツ協会では、障がい者スポーツ指導員の資格制度を設けて、こうした人材の養成に努めており、資格を持った指導員の多くがボランティアとして、地域で障害者のスポーツ活動の支援にあたっている。

日本社会では、障害のある人と無い人が日常的にふれあう機会が少ないが、障害者スポーツ大会は、障害のある人と無い人が出会う貴重な機会である。それ以上に、障害者の真の力を目の当たりにできる貴重な機会である。障害者スポーツの大会にボランティアとして参加し交流することにより、障害のある人たちを理解し、感動や友情を分かち合うことができる。また、「障害者は支えられる人」という固定概念がある中、昨今は障害者自らがスポーツボランティアとして活躍している。彼らの視点から他者への配慮の方法を学ぶことは多く、また障害の有無にかかわらず活動を共にすることで、互いへの理解を促進することができる。



©Special Olympics Nippon



©おいでませ！山口大会

3-5 障害者スポーツの国際大会

障害者スポーツの国際大会には、以下のものがある。

- 身体障害（肢体不自由、視覚障害）：パラリンピック
- 身体障害（聴覚障害）：デフリンピック
- 知的障害：スペシャルオリンピックス、パラリンピック

歴史的に見ると、障害別、あるいは競技別の障害者スポーツ組織は、徐々にパラリンピックという同一の競技会にまとまっていった。一方、パラリンピックに参加せず独自で国際大会を開催している組織が、デフリンピックとスペシャルオリンピックスである。デフリンピックは、1995年に国際パラリンピック委員会（IPC）を脱退しており、スペシャルオリンピックスもIPCには加盟していない。

デフリンピックは、1924年設立の「国際ろう者スポーツ委員会（ICSD）」を前身とする最古の障害者スポーツ組織であり、聴覚障害者を競技者とする。2001年から、大会名と共に組織名も「デフリンピック」という名称を使用している。

スペシャルオリンピックスは、スポーツを通じた知的障害者の自立と社会参加を目的とする障害者スポーツ組織であり、競技会開催だけでなく、地域社会での継続的なスポーツトレーニングの機会を提供している。

なお、2000年のシドニーパラリンピック以降、パラリンピックへの知的障害者の門戸が開ざされたため、国際知的障害者スポーツ連盟（INAS-FID）の主催によってグローバル大会が開催されるようになった（2012年ロンドンパラリンピックより、知的障害者の参加が再開）。また、障害者とは区別されるが、臓器移植者を競技者とした「世界移植者スポーツ大会」も開催されている。

パラリンピックは障害者の超エリートスポーツへと発展、名実ともに「もうひとつのオリンピック」である。なお、デフリンピックとスペシャルオリンピックスも、国際オリンピック委員会（IOC）が名称を認めた団体である。パラリンピック、デフリンピック、スペシャルオリンピックスはいずれも、夏季・冬季それぞれ4年に一度、世界規模で開催されている。

●障害の種類と国際スポーツ大会

| | 障害区分 | 障害 | 国際スポーツ大会 | |
|-------|--------------|-------|--------------|---------|
| 障害者 | 身体障害 | 肢体不自由 | 機能障害 | パラリンピック |
| | | | 頸椎損傷 | |
| | | | 脊髄損傷 | |
| | | | 切断 | |
| | | | 脳性まひ | |
| | | 視覚障害 | パラリンピック | |
| | | 聴覚障害 | デフリンピック | |
| | | 内部障害 | 無し | |
| | | 知的障害 | | パラリンピック |
| | | | | グローバル大会 |
| | | | スペシャルオリンピックス | |
| | 精神障害（発達障害含む） | | 無し | |
| 臓器移植者 | | | 世界移植者スポーツ大会 | |

【出典】（公財）日本障がい者スポーツ協会資料

コミュニケーションスキル

1 アイスブレイク

1-1 はじめに

スポーツボランティア活動の現場では、年齢、性別、社会経験、障害のある・無しにかかわらず様々な人たちが集まるため、豊かなコミュニケーション力が大切となる。コミュニケーションにおいて非常に大切なのが、他者を認め、理解する「他認の力」である。



1-2 心地よい空間を創り出すために

どんなスポーツイベントであっても、参加するボランティアたちにとって第一の難関が、他のボランティアたちとの交流である。よいスポーツボランティア・リーダー*がいれば、心地よい空間へとリードアップしてくれるので、スムーズに交流が図れるが、リードアップがない場合には、冷え切った空気が流れ続けることになりかねない。こうした事態を打開するのに必要なのが、「アイスブレイク」である。アイスブレイクとは、コミュニケーションにおいて温かいムードをつくり、冷え切った雰囲気や和らげることをいう。会場ではじめて出会ったボランティアには、自ら「こんにちは!」と挨拶するだけで、アイスブレイクのきっかけとなり、後々、コミュニケーションがとりやすくなる。

アイスブレイクの目的

- ・コミュニケーションのきっかけをつくる
- ・居心地の良い環境をつくる
- ・良好な関係性の集団をつくる

*スポーツボランティア・リーダー：ボランティア活動がスムーズに進むよう、チーム内のボランティアメンバーをまとめたり、イベント主催者と一般ボランティアとのパイプ役を努めたりする。リーダーには、スポーツボランティアの経験とリーダーシップが求められる。

1-3 グループワーク

スポーツボランティアの目標達成のために大切なことのひとつが、チームワークである。

チームワークを育むためには、「グループワーク」という手法を用いることが有効である。グループワークとは、グループに与えられた課題を、目的に合わせて練習・トレーニングしていく体験学習である。

ルールを守りながら、事前に設定した課題を解決する過程で以下の3点に気づくことが大切である。

- ①言語によるコミュニケーション（「伝える（話す）」「聴く」「質問する」）の必要性
- ②話し合いにおけるそれぞれの役割の大切さ
- ③コンセンサス（合意・形成）の方法及びその難しさと大切さ

日本スポーツボランティアネットワーク(JSVN)

1 活動について

1-1 設立意義と目的

2010年度の笹川スポーツ財団調査によると、47都道府県中14府県、18政令指定都市中6市に「スポーツボランティアバンク」が設置されており、ボランティアバンクは1999年から現在まで、年を追うごとに組織化されている。他方、過去10年間スポーツボランティア活動の実施率および実施希望者は、いずれもほぼ横ばいであることが明らかとなった。

このようななか、スポーツイベントを主たる活動とするスポーツボランティア組織の共通課題は、登録ボランティアへの活動機会の提供である。なかでも国際大会や国民体育大会開催のために立ち上げられた組織では、それ以降の活動機会が少なくなり、登録者数が減少する状況にある。スポーツ施設やプロスポーツクラブなどの活動母体があるボランティアは別として、活動母体がない民間のボランティア組織は、活動率の低下とともに今後の組織の存続が危惧されるところである。

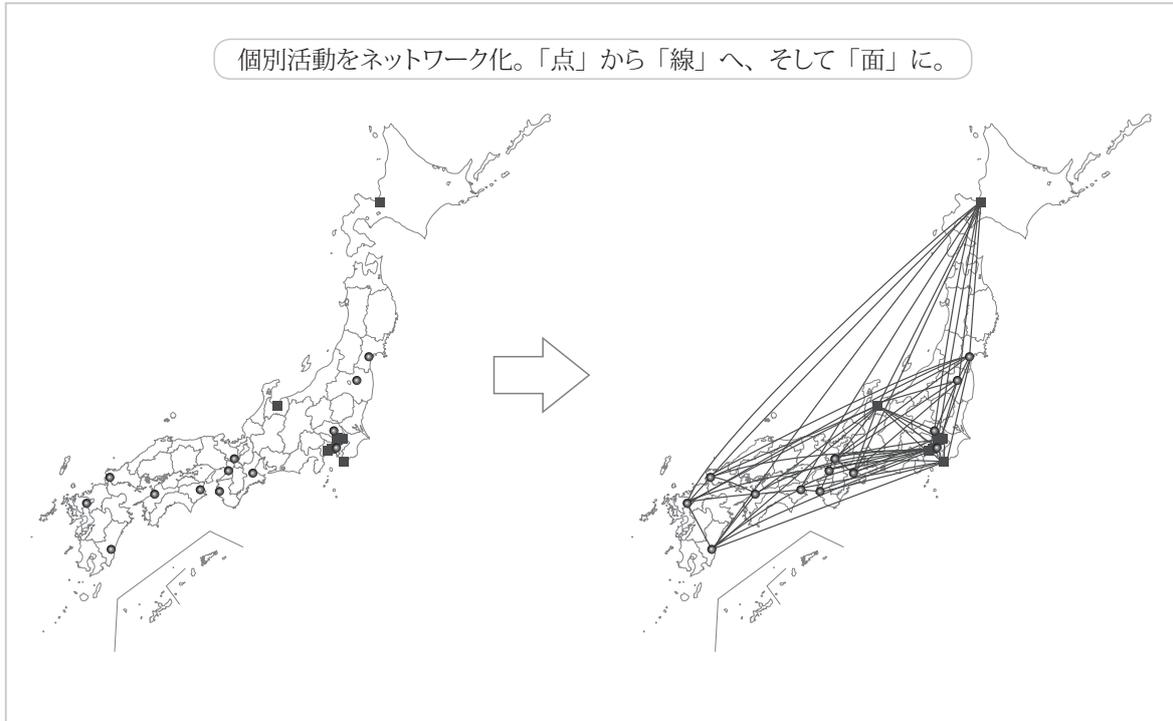
一方、2007年はじまった東京マラソンを契機に、スポーツボランティア活動の意義が広く社会に認知されるようになり、各地で開催されるスポーツイベントの成否にスポーツボランティアが大きく影響を与えるようになってきていることから、今まで以上にボランティア個人およびスポーツボランティア組織とボランティア受け入れ側との相互理解を深めることが重要となる。

今後、前述の課題に取り組むとともに、スポーツボランティア活動を全国に浸透させ、文化として確立するためには、全国各地のスポーツボランティア組織が「地域を越えた組織間連携を図り、活動状況を共有する」ネットワークを形成することが必要である。また、ネットワーク化により更に多くの活動機会の提供が可能となり、それぞれの組織活動を活発化することができる。

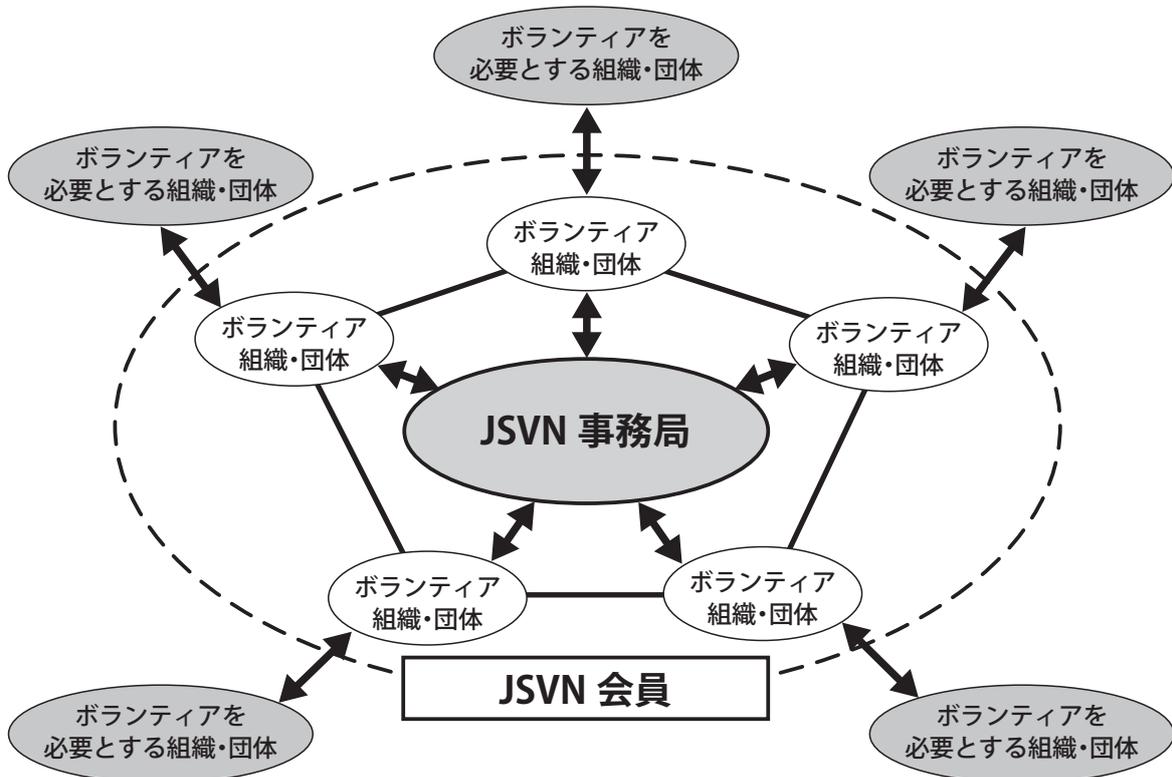
日本スポーツボランティアネットワーク(JSVN)は、前出のような現状をふまえ、「我が国のスポーツボランティア文化の醸成を図り、国民の生涯にわたるスポーツ活動を通じた豊かな生活の形成に寄与すること」を目的に、2012年に組織された特定非営利活動法人である。

全国でスポーツボランティアバンクを設置している都道府県は13、日本スポーツボランティアネットワーク会員団体は16であり、その他にも、国内で活動するスポーツボランティア組織が多くある。

●国内で活動するスポーツボランティア組織のネットワーク化イメージ



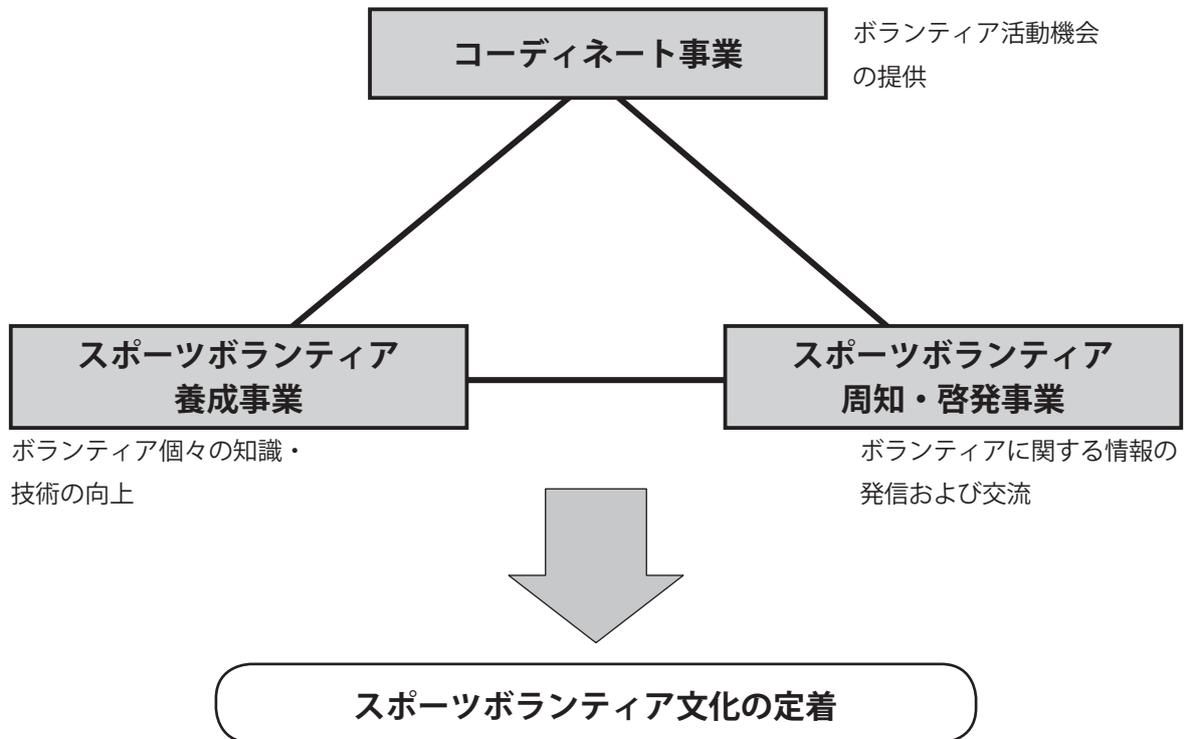
●JSVNと各ボランティア組織、ボランティアを必要とする側との関係



2 主な事業

2-1 3つの事業

JSVNでは、次の3つの事業を進めている。



2-2 スポーツボランティア養成事業

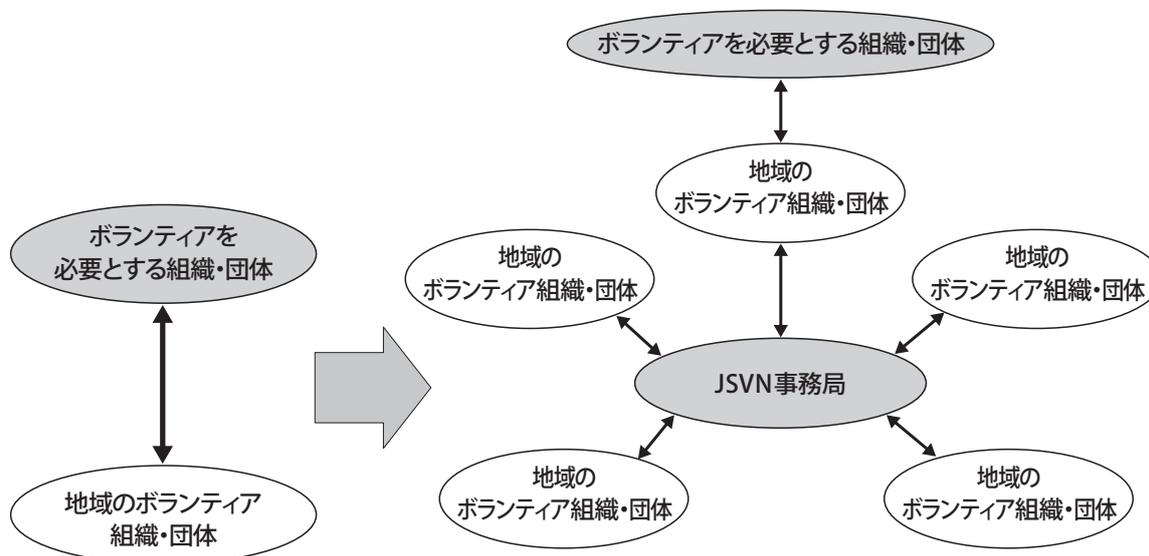
JSVNでは、スポーツボランティアの養成を目的に、ステップアップ形式で4つのプログラムを実施している。この他、ライセンス保有者に対して、自己啓発を促すためのスキルアップ研修会を開催し、人前での話し方教室や多様な文化・習慣を有する外国人への理解を深めるための講座、普通救命講習なども随時開催している。

●スポーツボランティア養成プログラム

| | |
|---------------------------------|--|
| スポーツボランティア研修会 | スポーツボランティア活動のやりがいや楽しみ方を知る。 |
| スポーツボランティア・リーダー養成研修会 | 一般ボランティアと共に、楽しく充実した活動をするためのリーダーシップを学ぶ。 |
| スポーツボランティア・上級リーダー養成研修会 | 主催者・ボランティア共に満足度の高い活動コーディネートを学ぶ。 |
| スポーツボランティア・コーディネーター養成研修会 | ボランティア組織の運営をサポートするための知識を学ぶ。 |

2-3 コーディネート事業

JSVNでは、「ボランティアを必要とする団体」と「ボランティアに参加したい人」をつなぐ情報提供事業を行っている。スポーツボランティアを必要とする団体からの情報を集め、全国の会員団体に活動情報を提供し、各地域のボランティア登録者に発信している。



2-4 スポーツボランティア周知・啓発事業

JSVNでは、スポーツボランティアに関する研究事例、スポーツボランティア活動に関する活動報告を行う「スポーツボランティアサミット」を開催し、これからのスポーツボランティアのあり方を見出し、広く社会に発信している。

地域で活動するボランティア組織、行政、スポーツ関係者など、種目や役割などを超え、スポーツボランティアにかかわるそれぞれの立場の人が一堂に会し、意見交換を行う「スポーツボランティアシンポジウム」等も開催している。さらに、オリンピックのボランティア経験者からの活動報告や、海外のボランティア事例など旬な話題やボランティアのノウハウ等を提供する公開講座等も開催している。



3 スポーツボランティア養成プログラムの概要

3-1 講習会概要

| | | | | |
|---------|---|---|---|--|
| 講習会名称 | スポーツボランティア研修会 | スポーツボランティア・リーダー養成研修会 | スポーツボランティア・上級リーダー養成研修会 | スポーツボランティア・コーディネーター養成研修会 |
| 内容 | スポーツボランティア活動に必要な基礎知識 | スポーツボランティア活動の実践知識 | スポーツボランティア活動におけるチームビルディング | スポーツボランティア組織の運営および安全管理 |
| 時間時間 | 半日 (2~3時間) | 1日 (5.5時間) | 2日 (11.5時間) | 2日 (12時間) |
| ライセンス | ライセンスなし (修了証の交付) | スポーツボランティア・リーダー | スポーツボランティア・上級リーダー | スポーツボランティア・コーディネーター |
| 受講資格 | ○中学生以上 ○スポーツボランティア活動の経験がある者 ○スポーツボランティア研修会を受講・修了した者 (但し、本会の正会員団体に所属するボランティアが受講する場合、正会員団体からの申請によりスポーツボランティア研修会の受講を免除することができる) | ○高校生以上 ○スポーツボランティア活動の経験がある者 ○スポーツボランティア・リーダーのライセンス取得後1年以上を経過し、かつ10日以上以上のスポーツボランティア活動経験がある者 ○本会または正会員団体が主催する下記のスキルアップ研修を受講し有効期限内のライセンスがある者。また、正会員団体が適任と認め推薦する者。 | ○18歳以上 ○スポーツボランティア・リーダーのライセンス取得後1年以上を経過し、かつ10日以上以上のスポーツボランティア活動経験がある者 ○本会または正会員団体が主催する下記のスキルアップ研修を受講し有効期限内のライセンスがある者。また、正会員団体が適任と認め推薦する者。 | ○スポーツボランティア・上級リーダーのライセンスを有している者 ○正会員団体に所属するボランティアであり、正会員団体の推薦がある者。または、正会員団体が適任と認め推薦する者。 |
| 受講料 | 1,500円 | 3,000円 | 6,000円 | 6,000円 |
| 評価・レポート | - | ○ | ○ | ○ |
| 判定 | - | ○ | ○ | ○ |
| 面接 | - | - | ○ | ○ |
| 有効期限 | - | 取得日の次の3月31日から2年後の同月日 ※以降3年毎の有効期限 | 取得日の次の3月31日から2年後の同月日 ※以降3年毎の有効期限 | 取得日の次の3月31日から2年後の同月日 ※以降3年毎の有効期限 |

3-2 更新講習概要

| | | | | |
|-------|--------|---|-----------------------|-------------------------|
| 講習会名称 | - | スポーツボランティア・リーダー更新講習 | スポーツボランティア・上級リーダー更新講習 | スポーツボランティア・コーディネーター更新講習 |
| 内容 | - | スポーツボランティアの現状と社会認識およびそれぞれのライセンスに求める新たなスキル | スポーツボランティア・上級リーダー更新講習 | スポーツボランティア・コーディネーター更新講習 |
| 時間 | 3時間以内 | 3時間以内 | 3時間以内 | 3時間以内 |
| 受講料 | 2,000円 | 2,000円 | 2,000円 | 2,000円 |

3-3 講師・指導者制度概要

| | | | |
|---------|---|--|--|
| 講師名称 | - | 准講師 | 講師 |
| 講師認定手続き | - | 「上級リーダー」のライセンスを有し、委員会の推薦を受け、かつ理事長が認めた者 | 「コーディネーター」のライセンスを有し、本人から申請があった者で、養成プログラム委員会の推薦を受け、かつ理事長が認めた者 |
| 有効期限 | - | 上級リーダー有効期間に準ずる | コーディネーター有効期間に準ずる |

□執筆および編集担当

■執筆（50音順）

東 正樹

宇佐美 彰朗

工藤 保子

澤内 隆

園部 さやか

竹澤 正剛

二宮 雅也

渡邊 浩美

■編集

日本スポーツボランティアネットワーク スポーツボランティア養成プログラム委員会

スポーツボランティア研修会 テキスト（平成29年10月版）

特定非営利活動法人 日本スポーツボランティアネットワーク

〒107-0052 東京都港区赤坂1-2-2 日本財団ビル3F

TEL：03-6229-5620 FAX：03-6229-5621

URL：https://spovol.net E-mail：info@jsvn.or.jp

本テキストの内容を引用された場合、本書の引用であることを明記してください。